

『資本論』第1巻第12章「分業とマニファクチュア」*

江原 慶†

2013年6月21日

第1節 マニファクチュアの二重の起源

「分業にもとづく協業は、マニファクチュアにおいてその古典的な姿を身につける」(S.356)

16c 半ば-18c の最後の 1/3 期：資本主義においてマニファクチュアが優勢な「本来のマニファクチュア時代」

- 「いろいろな種類の独立手工業の結合から出発し、これらの手工業は、非独立化され一面化されて、もはや一つの同じ商品の生産過程で互いに補足し合う部分作業でしかなくなる」(S.358)
- 「同種の手工業者たちの協業から出発し、同じ個人的手工業をそのいろいろな特殊作業に分解し、さらにこれらの特殊作業を分立化し独立化して、それぞれの作業が一人の特殊労働者の専有機能になるようにする」(S.358)

「しかし、その特殊な出発点がどれであろうと、その最終の姿は同じもの——人間をその諸器官とする一つの生産機構である」(S.358)

■マニファクチュアにおける分業の諸点

- 「生産過程をその特殊な諸段階に分解することは、この場合には、一つの手工業的活動をそのいろいろな部分作業に分解することとまったく一致する」(S.358)
→ そのため、個別労働者の熟練を排除できない
- 「この狭い技術的基礎は、生産過程の真に科学的な分解を排除する」(S.358)
- 「どの労働者もそれぞれただ一つの部分機能だけに適合させられて、彼の労働力はこの部分機能の終生変わらない器官にされてしまう」(S.359)
- 「この分業は、協業の一つの特殊な種類なのであって、その利点の多くは協業の一般的な本質から生ずる」(S.359)

第2節 部分労働者とその道具

■労働者の熟練度の向上

- 「一生涯同じ一つの単純な作業に従事する労働者は、自分の全身をこの作業の自動的な一面的な器官にしてしまい、したがって、多くの作業を次々にやってゆく手工業者に比べればその作業により少ない時間を費やす」(S.359)
- 「部分労働がある一人の人の専有機能として独立化されてからは、部分労働の方法も改良される」(S.359)
- 「このようにして獲得された技術上の手練は、やがて固定され、堆積され、伝達される」(S.359)

これは既存の自然発生的な分業を作業場の中で押し進めることで達成される。

また、マニファクチュアにおける分業の固定化は、カースト制度や同職組合における職業の固定化に対応する。

■作業の転換の節減

* 2013 年度小幡ゼミ

† 東京大学大学院経済学研究科博士課程

- 作業の転換を無くすことによって、労働の強度を増大させるか労働力の不生産的消費を減少させ、生産性が上がる
- 「しかし、他面では一様な労働の連続は活気の緊張力や高揚力を破壊する」(S.361)

■道具の細分化

- 「マニファクチュア時代は、労働用具を部分労働者の専有な特殊機能に適合させることによって、労働用具を単純化し改良し多種類にする」(S.361)
- 「それと同時に、この時代は、単純な諸道具の結合から成り立つ機械の物質的諸条件の一つをつくりだす」(S.362)

第3節 マニファクチュアの二つの基本形態——異種のマニファクチュアと有機的マニファクチュア

この2つは「本質的に違う二つの種類をなしており、またことにマニファクチュアがのちに機械経営の大工業に転化されるときにもまったく違った役割を演じている」(S.362)

異種のマニファクチュア 「独立の部分生産物の単に機械的な組み立てによってつくられる」(S.362)

「この場合には、… 同じ作業上での部分労働者の結合を偶然的なものにする」(S.363)

有機的マニファクチュア 「相互に関連のある一連の諸過程や諸操作によってその完成姿態を与えられる」(S.362)

- これにより「元来は分散していた手工業を結合するかぎりでは、それは製品の特殊な生産段階のあいだの空間的分離を少なくする」=「一般的な協業的な性格」(S.364)
- 他方「これらの生産段階はそれだけ多くの手工業的部分労働として互いに独立化される」(S.364)
→「マニファクチュアは、ただ協業の既存の諸条件を見出すだけではなく、その一部分を手工業的活動の分解によってはじめて創造する」(S.365)
- 「マニファクチュアでは、一定の労働時間で一定量の生産物を供給するということが生産過程そのものの技術上の法則になる」(S.366)
←→商品生産一般での「競争の外的強制」(S.366)
- 各過程への労働者および労働者群の比例的配分(S.366-368)
- 結合マニファクチュア(S.368)

■マニファクチュア・機械・等級制

- 「マニファクチュア時代は… 機械の使用をも散在的には発展させる」(S.368)が、だいたいにおいて「脇役」(S.369)
「機械の発明に一役を演じているのは、マニファクチュア労働者ではなく、学者や手工業者であり、農民(プリンドリ)などでさえもある」(S.369, 注44)
- 「マニファクチュア時代に独自の機械は、やはり、多数の部分労働者の結合された全体労働者そのものである」(S.369)
「労働者達は彼らの比較的すぐれた属性にしたがって区分され、分類され、編成される」(S.369)
→「マニファクチュアは労働力の等級制を発展させるのであり、これには労質の等級が対応する」(S.370)
→「等級制的段階づけと並んで、熟練労働者と不熟練労働者とへの労働者の簡単な区分が現れる」(S.371)
→いずれにあっても修業費が下がり、労働力の価値が下がる。
「その例外が生ずるのは、労働過程の分解によって、手工業経営では全然現れなかったかまたは同じ程

度には現れなかった新しい包括的な機能が生み出されるかぎりのことである」(S.371)

第4節 マニファクチュアのなかでの分業と社会のなかでの分業

■社会的分業の発生

「社会のなかでの分業と、それに対応して諸個人が特殊な職業部門に局限されることは、マニファクチュアのなかでの分業と同じように、相反する諸出発点から発展する」(S.372)

- 「生理的分業が出発点となる場合には、一つの直接に結成されている全体の特殊な諸器官が、他の共同体との商品交換から主要な衝撃を受ける分解過程によって互いに分離し、分解し、独立して、ついに、いろいろな労働の関連が商品としての生産物の交換によって媒介される点に達する」(S.373)
- 「生産物交換は、いろいろな家族や種族や共同体が接触する地点で発生する」(S.372)
「この場合に社会的分業が発生するのは、もともと違っただけで互いに依存し合っていない諸生産部門の間の交換によってである」(S.373)

■社会的分業とマニファクチュア的分業の関係

「商品生産と商品流通は資本主義的生産様式の一般的前提なのだから、マニファクチュア的分業は、社会のなかでの分業がすでにある程度まで成熟していることを必要とする。また逆に、マニファクチュア的分業はこの社会的分業に反作用してこれを発展させ何倍にも複雑にする」(S.374)

しかし両者は「本質的に違っている」(S.375)

「このようないろいろな生産部門が互いに均衡に近づこうとする不断の傾向は、ただこの均衡の不断の解消 *beständige Aufhebung dieses Gleichgewichts* にたいする反作用として働くだけである。作業場のなかでの分業ではア・プリオリに計画的に守られる規則が、社会のなかでの分業では、ただア・ポストエリオリに、内的な、無言の、市場価格の晴雨計的変動によって知覚される、商品生産者たちの無規律な恣意を圧倒する自然必然性として、作用するだけである」(S.377)

■資本主義的分業の歴史性

「資本主義的生産様式では社会的分業の無政府とマニファクチュア的分業の専制とが互いに条件になり合う」(S.377) が、それ以前の社会では社会的分業が権威的に組織され、作業場内分業はほとんど発展しない。

「一つの社会の全体のなかでの分業は、商品交換によって媒介されているかどうかは別として、非常にさまざまな経済的社会構成体に属するのであるが、マニファクチュア的分業は、資本主義的生産様式のまったく独自の創造物なのである」(S.380)

第5節 マニファクチュアの資本主義的性格

- 「比較的多数の労働者が同じ資本の指揮のもとにあるということは、協業一般の自然発生的な基礎をなしているが、同様にマニファクチュアのそれをもなしている。逆にまたマニファクチュア的分業は充用労働者数の増大を技術上の必然性にまで発展させる」(S.380)
- マニファクチュアは「労働者の細部の熟練を温室的に助成」(S.381) して「個人的労働力そのものが、資本に売られなければ用をなさない」(S.382) ようにする
→「部分労働者たちにたいして、物質的生産過程の精神的な諸能力を、他人の所有として、また彼らを支配する権力として対立させる」(S.382)。この過程は単純協業にはじまり、マニファクチュアで発展し、大工業において完了する。
- 「社会的生産過程の独自に資本主義的な形態としては… マニファクチュア的分業は、ただ、相対的剰余価値を生み出すための… 一つの特異な方法でしかない」(S.386)
- 「マニファクチュア時代にはじめて独自の科学として現れる経済学」(S.386) が社会的分業を量と交換

価値の側面から考察するのに対し、「古典的古代の著述家たち」は質と使用価値の改善を説く。

■マニュファクチュアの限界

- 不熟練労働者よりも熟練労働者の方が多い。
- 能力等に応じた分業を実現しようとしても、慣習や男子労働者（既存の労働者）の抵抗を受ける。
- 長い修業期間を必要とする部面を残す。

→「こういうわけで、マニュファクチュア時代の全体をつうじて、労働者の無規律についての苦情が絶えない」(S.390)

「同時に、マニュファクチュアは、社会的生産をその全範囲にわたってとらえることも、その根底から変革することもできなかった」(S.390)

→マニュファクチュア的分業は機械を生み出し、機械でもって手工業的活動が廃棄されることで、資本の支配の限界も乗り越えられる。

論点・疑問点

■マニュファクチュアの起源と本源的蓄積

両者はどういう関係にあるのか。

「いろいろな種類の独立手工業の労働者たちが、同じ資本の指揮の下にある一つの作業場に結合される」(S.356)とあるが、なぜこれが起きるのか。

■マニュファクチュアにおける分業の性質

マニュファクチュアに分業は手工業的な熟練を基礎とし、そのため「真に科学的な分解を排除する」というS.358の規定と、それは「単純な諸道具の結合から成り立つ機械の物質的諸条件の一つをつくりだす」というS.362の規定はどういう関係にあるのか。

マニュファクチュアは熟練をベースにするのか、それとも機械化を押し進める過渡的形態なのか。

■異種のマニュファクチュアと有機的マニュファクチュア

この区分はどういう意味で「本質的に違う二つの種類」なのか。

■工場内分業と社会的分業の対比

S.377に見られる、「工場内分業=計画的、社会的分業=無政府的」という二分法は適当か。